

緘黙児S子の指導

足利市立山辺小学校 橋本徳二

1はじめに

入学式のとき、名まえを呼んでも黙っている、口も動かさず起立もしない子を担任することになった。

今まで、10数年の教員生活を送っているが、このような児童を担任したのは初めてである。入学してまもない内は、何とかしなければならないという気持ちは募るもの的新一年生の指導に追われ手のつけようがなかった。幸いなことに、朝教室に入るたびに全員の姿が見えたのでほっとした。

このような児童を何というかも知らなかった。しかし、私はこのS子を担任したとき、「ああ、いい子が来てくれた」と思った。未知のものに遭遇したことと、かねてから教育相談ということを研究してみたいという気持しがあったからである。「これぞ、よいチャンス」と思った。

先に述べたとおり、今までにこのような児童を担任したのは初めてである。願ってもなかなかあえるものではない。学級経営でのひとつのテーマが、迷わずしてできたのである。

親から「こういう子ですがよろしく」と頼まれた。だが今までに経験のない、何ら知識もないものが「だいじょうぶですよ」とは言えなかつた。「私も、どのように指導したらよいかわかりませんが、これから勉強しながらできるだけの努力をしてみます。長い目で見てください」としか言えなかつた。

家では話をするというのに、集団の中では話をしないということは、人間関係から生じた問題である。だから簡単にはできないにしてもこれをよくしてやればよいのだ。私にもできるのではないかとも考えた。しかし、私にとっては未知のものであり、人前で「なんとかなる」とは言えなかつた。

保育園入園以来の緘黙であり、そう簡単にいくものではないことは想像のつくことである。これらに關係のある先生から、いろいろと話を聞いたり、アドバイスや激励も受けた。とにかくあせらずにいかねばならないことは、頭の中においておくことにした。

以下、この緘黙児S子を指導してきたことを、ささやかな実践記録をもとに述べていきたいと思う。未経験のものが、試行錯誤で取り組んできたものであり、よい指導とは言えないと思う。

読者の皆さんからのご指導をいただきたくお願いをし、この実践記録が、このような児童の指導に何か役立てば幸いである。

2 生育史

(1) 家族関係

	年令	仕事	性 格 や 行 動
父	43	農業 縫製業	・気短かである。きちょう面なところがある。（母のことば） ・農業と縫製業を営む。
母	40	"	・お天気やなところがある。（母のことば） ・しっかりした感じである。（担任が見たようす） ・仕事が忙しく子どものめんどうがあまりみてやれない （母のことば）
兄	小学 2年		・気短かである。（母のことば） ・学校では手わすらが多い（母のことば） ・妹のめんどうをよくみる（　　"　　）
本人	小学 1年		・学校でのできごとを話したがらない。（母のことば） ・兄や妹と遊ぶことが多い（　"　） ・因業である。母の言う事を聞かないこともある（　"　） ・友達が来ると遊ぶが自分からは外に出ていかない（　"　） ・作業がていねいで、よくできる（担任の見たようす） ・あまり表情に出さない（担任の見たようす）
妹	3		・保育所に通っている ・活発な子（母のことば）
祖父	85		・がんこである。（母のことば）

(2) 経済状況

- ・ 農業を営む（田畠で1町）
- ・ 父母で縫製を営む。
- ・ 経済状況は普通である。

(3) 出産状況

- ・ 妊娠中の母親の健康状況は、特に異状はなかった。
- ・ 安産であり、体重は3,150g

(4) 健康状況

- ・ 食が細く、体重が増えなく苦労した。（3才頃まで）
- ・ 話すのは1年位いで始まった。
- ・ 歩き出しが1年4か月位。
- ・ やや偏食がある。（現在も）

(5) 保育園へ行く前の遊びのようす

近所の友だちと遊ばず、兄と遊ぶだけだった。いつも家の中でテレビを見たり、絵本を見たりしていた。家庭 자체が近所との行き来が少ないようで、家以外で遊ぶことは少なかった。母は仕事（縫製）が忙しく、妹が生まれたので、そちらに手がかかり S子にはあまり遊んでやれなかつた。

(6) 保育園（R）における生活

3年保育に欠員があった（2月）ので、途中ではあったが1才年上の幼児の仲間入りをした。保育園へ行くのはいやがらなかつた。保育園では、周囲の子がいろいろと世話をみたり、やってくれたりした。4月になって、同年令の3才保育の幼児と一緒にになった。話をしないことについては、保育園からの連絡はなく、おかしいと気がついたのは、秋の運動会（4才5か月）のときだった。保育園児が全員でやるべきは参加しているが、クラスだけ（少ない人数）の種目のときは、みんなと一緒にやらず、テントの片隅にひとりでした。遊戯会にも出なかつた。年長組になって、運動会や遊戯会に出た。保育園の先生は毎年かわつた。卒園ごろ、聞かれたことだけ先生に小さい声で話したという。

(7) 親の態度や家庭のようす

- 父………子どもをかわいがるが、一面きびしいところがある。
- 母………お天気やなところがある。あまやかす方である。
- 祖父………がんこである。
- 家庭は、あたたかみが少し欠けているようだ。食事や旅行などで外出することは少ない。

3 指導の経過

(1) 担任当初の問題点

- 学校では、誰とも口をきかない。友だちの遊んでいるのを見ていて、仲間入りをしない。
- 動作や態度に活力がない。

〔学習面〕

- 言われたことはできる。理解力は普通。指名しても答えず、返事もしない。

〔生活場面〕

- 友だちと話をしないで、みんなのあとについたり近くにいる。校庭では、友だちが遊んでいるのを見ている。友だちが誘うと仲間入りをするが、話をしない。

(2) 原因の所在

生育歴や親の養育態度などを分析し考察した結果、穢黙の原因をつぎのように考えた。

- 保育園に入る前、父母の多忙（農業・縫製）と妹の誕生等があり、手が十分にさしのべられなかつた。
— 親子の心のふれあい・愛情の不足 —

- 家庭以外との交流が少なかった。
 - 同年令の子とのふれあい・遊びの不足 —
 - 保育園に補欠として途中(2月)から入り、しかも1才以上の幼児の仲間入りをした。
 - 集団生活に入るのに抵抗が大きかった —
- 以上の結果、対人接触の不定による集団参加への不調、友だち関係の不調からくる社会性の未熟に原因があると思われる。

(3) 指導の方針

[学 校]

- 学級での生活及び学習の中で集団生活に適応を図る。
 - あたたかい雰囲気づくり —
- 行動に対し、認める・ほめる・励ますの3点で自信を与える。
 - 自信を与える指導 —
- 進歩したことは、わずかなことでも家庭へ連絡し、励ます。
 - 家庭と学校で歩調を合わせる —

[家庭に対する指導]

- あせらず時間をかけて取り組む。
- 話すことについては強制をしない。
- どんなことでも、できることは認め、ほめる。
- 学校からのたより(連絡)をもとに励ます。
- 仲のよい友だちの家庭と連絡をとり、交流(行ったりきたりして遊ぶ)を少しずつ進める。

4 指導の経過とその変容

(これから書かれていく内容は、すべて家庭に連絡したものである。)

4月11日(月)

[名まえを読んでも返事をしない。口も動かさない。ただ無表情に見ているだけである。S子という女の児童を担任した。]

きょうは入学式である。みんな行儀よくすわっている。初めに担任の名まえを教えた。つぎに児童ひとりひとりの名まえを呼び起立させた。ひとりの女の児童S子が返事をしない。どうしたのだろう。再度呼んでも、いっこうに反応なし。この児童は普通の児童でないことがわかった。顔色がわるくて、暗い感じである。黙っている。他の全員は、みんな「はい」と返事ができ、しっかり起立もした。

4月12日(火)

全員を便所へ連れていった。途中S子に「この靴、だれか名まえを書いてくれたの?」と聞いた。口をわずかに動かすようすが見られた。口もとまで近づけて、もう一度聞いてみた。「おかあさん」と言っているようだった。

5月17日(火)

[S子は、友だち3人と上級生の遊ぶのを黙って見ていた。3人にこれからも遊んでくれるよう頼む。]

きょうは、S子と校庭で遊んでみようと考え、一度職員室へ戻り外に出てみた。数人のクラスの児童と見つけて歩いたが、大勢なので見つけることができなかつた。第3校時になって、一緒に遊んだO子、T子、H子の3人の児童にそのときのようすを聞いた。休み時間は、大きい児童が遊んでいるのを4人で見ていたとのことである。そのときのS子は、話をせず、他の3人と一緒に見ていただけである。この3人は、比較的おとなしい、しっかりした児童であり、これからも一緒に遊んでくれるよう、担任からも頼む。

5月20日(金)

[多くの級友が、S子をあたたかく包むようにして遊ぶようになる。遊びの中で、友だちと少し話す。]

道徳の時間に「みんなと仲よく遊ぶ」ことについて学習をした。そのとき、きょうの休み時間にだれと遊んだか、ひとりひとり言わせた。S子は、まだ話をしないが、全員に言わせたところによると、6~7人の女の児童が「S子ちゃん」と言った。それらの子が同じく遊んだ仲間の名まえをあげず「S子ちゃん」と言った。S子を中心遊んだような雰囲気であった。担任からは特別な指導はしなかつた。ただ前回(5月17日)に一緒に遊んだ3人の児童には「これからも一緒に遊んでね」と内々に話してはおいた。みんなと一緒にプールわきのコンクリート製の電柱(横に置いてあり遊具として利用)に乗って、じゃんけんをしながら遊んだようだ。いく人から話を聞くと、まだ話はあまりしないが、少し話をするときがあるようだ。

(母親ヘアドバイス)

おかげさんから「話をしなさい」というのではなく、「きょうは友だちと遊んだのね。お話をしながら遊んだんだってね。先生や友だちがほめていたよ。これからも。うんと遊んでね」と励ましてくださいと伝えた。遊んでくれた仲間は、みんなおとなしいがやさしいしっかりした子どもたちである。担任としては、今のところクラスの子どもたちと自然な形で遊ばせたいと思う。少しづつ、長い時間をかけて無理ない前進をさせたいと思う。

5月26日(木)

[S子がとなりの席のT君と話しているようすを担任が初めて見た。]

机や椅子の大きさ調べ(号数調査)をしているとき、となりの席のT君と話しているようすを初めて見た。(今までにも、担任の目のとまらないところで話をしていることがあったかも知れないが……)近くに寄って聞いていたら「9号」という言葉を普通の大きさで話していた。そのとき、「もう一度言ってごらん」と言ったら、周囲の目を気にして話をしなくなってしまった。また休み時間、室内でT君と話しているようすが見られた。最近、生活態度に明るさが見られてきた。

7月15日(金)

[話をしないが、学習はしっかりやっている。算数の学習では、クラスで、はやく解けた。]

算数の時間に「20までのかず」を学習して練習問題にはいった。ひとりひとりできた顔に担任のところで丸をもらうわけだが、S子は第1回目を2番目にしてきた。第2回目は1番であった。すべて正しくできた。

9月9日(金)

[国語の教科書の朗読をさせたができない。担任の後をつけて読んだ。(となりの児童にわずかに聞きとれる程度)]

国語の時間に「木のはとことり」の单元を5行ぐらい全員に読ませた。S子にも読ませようとした。しかし、まわりをちょっと見、それから担任の方を見て黙ってしまう。そこで担任が短く区切って読んでやり、その後をつけて読ませた。口をわずかに動かし、となりのT君にわずかに聞える程度だった。担任までは聞えなかった。みんなから拍手を受けた。休み時間にほめてやった。うれしそうな顔だった。

9月13日(火)

休み時間に担任のところへ来た。何か言いたそうだが話さない。そこで「どのしたの?」と言ったら、口をわずかに動かす程度でわからない。耳を近づけてもう一度聞くと、「きもちが悪い」といった。父母に連絡しようと職員室へ行く途中、「自分でお母さんに話せるかい。」と言ったところ、頭を横にふった。これについては中止した。

9月17日(土)

きょうは、背の順に並ぶ練習をし、自分の番号をひとりずつ言わせた。そのときS子は、「なな」と今までよりやや大きい声で言えた。

10月21日(金)

[放課後、校庭の築山(山の中へ三方より入れる主管がある)やその近くで「しりとり遊び」をする。綾子の先き生きした声が聞けた。]

クラブ終了後、校庭にいたらS子、N子、G子の3人が担任のところへ寄ってきた。ふだん遊んでやれないで、「この機を」と思い遊んだ。「すべり台からおりてたら『はい』といえるかな」と言い、N子から順にやらせた。S子は、ふだんよりやや大きい声(普通の児童よりやや大)で言えた。うれしそうにやった。その後3人で輪になって、しりとり遊びをした。何とか言えた。途中から同クラスのY君、Y君の兄(やや知恵遅れぎみ)が入り一緒にやった。その後、すべり台からおりるとき(ジャングルジムに付いている)「5まで数えながらおりてみよう」「10までやってみよう」と言わせてみた。S子は、みんなと一緒にできた。終わりに築山の空洞を利用し(3方)しりとり遊びをした。こちらは担任、S子、N子、G子の4人で組み、相手は山崎兄弟である。このときの綾子の声は、日常遊んでいるときの子どもの声であった。

帰りにひとりひとり「さようなら」と言わせてみた。S子は、他の4人の差を感じさせない声であった。今日は、S子と遊び、生の声が聞こえたよい一日であった。

10月24日(月)

[先週に続き、今度は室内でしりとり遊びを試みた。しかし、前ほどの元気のよい声は聞えなかった。]

先週の金曜日のクラブ活動後の遊びで進歩があったので、本日再度試みた。先週のメンバーのN子、S子、G子のほか、ふだんS子と遊ぶO子、K子の2人を加えた。初め教室でしりとり遊びをした。（条件が変わった主な点は、①室内である。②2人を加えたの2点）

しかし、先週ほどの声は出なかった。そこで、また校庭の築山の空洞でしりとり遊びをした。担任を入れて、6人が2組に分かれ、担任が見えないところから声を出して、しりとりをした。このときは、先週に聞かせてくれた声であり、他の児童との差をわずかしか感じなかつた。

それから、「お正月」の歌を少しずつ区切って歌ってみた。「もういくつねると、「お正月」「お正月には」……というように歌わせた。初めは、歌うというよりも、言葉を出している位いであった。なれてきたら歌う感じが出てきた。これは、やや程度が高かつた。

再度、室内に戻って「はないいちもんめ」をした。S子以外の4人は遊び方を知っているので、担任とS子は見ていた。途中から、S子、つぎに担任も入った。みんなは大きな声でやっているが、S子は大声を出している様子もなく、ただうれしそうだった。

11月10日（金）

〔学習発表会で劇「大きなかぶ」をやることになり、1人1回舞台で話すことになった。いろいろ励ましながら練習したが無理と考えた。同じ動物（ねこ）の3人で言わせることにした。楽しそうにマイクの前で口をあけて言っているようだった。〕

（母親へ連絡）

夜、家庭に電話した。学習発表会の劇では、ねこが3人で腕を組んで同時に言わせることを伝えた。母親は、「当日のことが、どうなるかと不安でした」と言った。だから、「当日は心配なくできます」また不自然さもないから安心して見ていただくよう話した。

12月8日（木）

〔学習中、今までにない声で話すことができた。少し周囲を気にしていたが、だんだんなくなりつつある。〕

学習中、S子が今までにない声で話すようになった。算数の学習で、「8+5は？」と聞いたとき、「13」と答えた。11月下旬から12月の初めにかけて、だんだん話すようになってきた。S子が話をすると、他の児童が「話をした」というような驚きが見られ、気にしているようだった。今までS子の発言のあと、「よく言えたね」とか「もう一度言ってごらん」というように励ましてきた。きょうは担任も「特別児童」というようなようすは見せず、特別扱いはしなかつた。

1月17日（火）

〔体育の時間に「おぶいっこ」を2人組でやった。2人で声を合わせて、大きい声で数えていた。算数の時間でも、挙手をして発表ができた。〕

体育の時間に2人組でおぶいっこをやった。10歩おぶったら交代する。S子はN子と組み2人で元気よく声を合わせてやっていた。担任もS子の元気よい声を聞いた。元気よくやっているなあと思った。おぶいっこが終わったとき、2人にみんなの前で数えながらやってもらったら、やはり大きな声でできた。よくできたので、みんなから拍手を受けた。給食のときに、

「きょうの体育のとき、大きな声でできたね。これからもあのようにやるのだよ」と話した。
「大きな声で返事をしてごらん」と言ったら、元気よい声で「はい」と返事ができた。
算数の時間にも「たし算は、どんなときに使いますか」の問いにS子は挙手をして、小さい声だが「あわせるとき」と発表できた。ただ、このときは担任が聞きとれただけで、クラス全体の児童に聞きとれる大きさではなかった。

(母への連絡)

今後もことばについてあまり強調しないで、機会をとらえて励ましていくようにしていきたいことを伝える。

2月9日(木)

[音楽の時間に和音のハンドサインをみんなの前へ出てきてよくやれた。仲間から拍手を受ける。
音楽の時間に和音の練習をした。担任がオルガンで出した1の和音(ドミソを一度にひく)と5の和音(ソシレ)をハンドサインで出すことをやった。担任が2つの和音を続けたり、交互に交えて出す。これを全員で何回か練習した。その後、「では、だれか前へ出てやれる人?」と言った。ほとんどの児童ができるわけだが、前へ出てやれるほどの自信はなさそうだった。この児童はできるだろうと、数名を指名してやらせた。その次に「S子さん」と言ってしまった。どうなるか心配した。そのとき何のためらいもなく、すんなり前へ出てきた。安心した。すべて正しくできた。よくできたので前にやった数名のものと同じく拍手を受けた。]

2月9日(木)

[放課後、朗読の練習をした。20人の中で小さい声ではあったが朗読できた。]

放課後、国語の朗読練習をした。ハーモニカの練習で残った児童12人、作業を手伝う児童7人ほどを残した。児童が20人ほどいるために教室では朗読練習は適当でないと考え、隣りの1年4組の教室でやった。

初め、仲の良いG子、M子、C子とS子の4人で、一斉に声を合わせて読ませた。つぎに、G子、M子、S子、C子の順で何回か読ませ、そのたびに励ました。その後、担任の教室に残っている児童を3~4名ずつ加えた。この児童は本を持っていないので、4人の読むのを聞いて覚えさせて言わせた。S子たちは本を持っているのでうれしそう。しかし、加わった数名の者は、覚えようと真剣だった。対称的な顔だった。みんなで7人になり順に言わせた。

このような方法で数名ずつ加え、全員で20人程の児童の中で読ませた。S子の声は普通の児童ほど大きくはないが、他のものに聞けるだけの声であった。初めて朗読ができた。明日は朗読テストなので全員(39名)の中でやってみるが、どんなものだろう。うまくいけばよいが.....?

(発音にやや不明瞭なようすが見られた。これは口形をはっきりつくらないことと、読もう、声を出そうという意欲(気持ち)がもうひとつ育ちきれていないことなどが原因らしい。)

2月10日(金)

[クラス全員の中で朗読ができた。全員にどうにか聞える大きさであった。]

きょうは朗読テストである。クラスの10名ほどが受けた後でS子の番がきた。昨日練習し

た単元のはじめの5行をあてるように組んで読ませた。うまくいった。全員にどうにか聞こえる大きさだった。仲間も静かに聞き、みんなから拍手がおこった。担任から「S子さんは、よくできました。もうできるのです」と話してやった。「これからも、きょうと同じように読んでください」と話す。うれしそうだった。

(母への連絡)

きょうは、小さい声であったが、とにかく全員の中で読めた。声の大きさは、何回かやっていくうちに自信がつき、更に大きくなるでしょうと伝えた。朗読ができたので、大いにほめてやってくれるように伝えた。

5 ことばの教室（山辺小学校）の所見

(1) I T P A 言語学習能力診断検査の結果

検査月日 昭和53年2月21日

検査結果では、表現能力のうち、ことばの表現が著しくおちていた。

この項目に欠陥を持つ子どもは

- | | |
|----------------------|-------------------------|
| A 基本的な音声技能が欠如している子ども | D 自動的な文法能力が欠如している子ども |
| B 語りが十分でない子ども | E 対人的なコミュニケーションが不十分な子ども |
| C 考えを自発的に表現できない子ども | |

等であると言われている。本児の場合、理解できる言語の内容と量には問題がなく、そのうえ、流暢な音読ができるなどを考え合わせると、問題点は主にEによるものと考えられる。

(2) 考察

上記の検査及び家庭での朗読（テープ）のようすから考察すると、つぎのようになる。

S児はことばをコミュニケーションの道具として使う習慣や経験が、何らかの原因でくずれ、あるいは育ちそびれたために、言語生活の態度において同年令の児童との間にはっきりした差を示す問題児となっていた。

しかし、現在、周囲の人々との関係が安定したものになりつつある中で、「話そうとする気持ち」が次第にふくれ上がり、集団の中での本の朗読や担任との会話ができるようになってきた。今後の指導事項としては、

- | | |
|--------------|------------------------|
| A 会話の量をふやす。 | C 朗読時に、文末を消すような読み方を直す。 |
| B 音量を十分につける。 | D 話すことに対する自信をつける。 |

等があげられるが、学級担任のS児に対する理解ある学級づくりの成功と相まって、S児の言語生活は十分なものになる日は、きっと到来するものと思われる。

6 指導をふりかえって

入学当時、名まえを呼んでも黙っている。口を動かさない。起立もしないS子が間もなく1年を終えようとしている。今のS子は、クラス全員の中でみんなになんとか聞きとれるほどの声で朗読をやれるようになった。（2月10日）

また、靴に書かれた名まえを「だれに書いてもらったの？」と聞いたとき、口を動かす程度だったS子（4月12日）が、担任のところへ来て、声は小さいながらも、必要なことを話せることができるようになった。

あるときは、クラスのみんなが自信なさそうなとき、指名されたら全員の前へ出てやってのけた。（2月9日）

一方、家庭においては、2学期の中頃から、学校のようすを話すようになり、また、ひとりでお金を持って店にも行けるようになったという。現在（2月末）では、大変明るくなり、いろいろな人との会話ができるようになり、兄の友だちが来ると一緒に遊ぶようになった。（母のことば）

S子は、この1年間ずいぶん変容をした。あと1か月で1年を終えようとするが、今までの指導をふりかえってみたい。

(1) S子の指導は、他の児童の指導と基本的なものは同じであると考えてきた。常に行動したことを探める、認める、励ますの3点で自信を与えるようにしてきた。これは単に問題をもった児童に限らず、すべての指導の原則のひとつであると思う。

～～～ほめる・認める・励ますことにより自信をわかせる～～～

(2) S子の進歩は足踏みのような状態が続くことも多かったが、ある期間をおいてみると、雪が解けるがごとくよくなってきた。だから、あせらず指導のチャンスを見のがさないことを心がけた。
～～～あせらず、児童をよく見て、指導のチャンスを逃さない～～～

(3) 担任のよくしたいという気持ちが、クラスの仲間にも言わずして伝わり、温かい助け合いがあった。雰囲気づくりが大切のようだ。

～～～あたたかく助け合う学級づくり～～～

(4) 父母には、ことばについて強制をしないようにという指導をしながらも、自分自身（担任）では、何とかしたいという気持ちがあり、時には無理な指導がおこりがちだった。しかし、指導がなければ進歩もあまり期待できない。児童の気持ちを察しながら、常に強制的なイメージを与えないようにする。

～～～強制のイメージを与えない～～～

(5) 室内での遊びや指導よりも、外での遊びや指導の方が効果的であった。人間関係をよくするために、特に初期は、そういうことがよいと思う。ただ指導内容によっては、室内でなければならないものもあるが、できるだけ児童と遊びながら心を開いていくことがよいと思う。しかし、実際には少なかったことを強く反省している。

～～～戸外で遊びながら、心を開く～～～

(6) そのときの児童の技能に応じて指導をし、記録をとったが、できたらもう少し計画的な指導というものを考えていくとよかったです。ただ初めての指導なので見通しが立たなかった。経験を積んで、指導にある程度の見通しというものをもてるようになりたい。

～～～ 一応の指導の見通しを立てると共に、技能に応じた臨機応変な指導を ～～～

(7) 観察や指導の記録を、まめにとることが必要であった。特に初期（S子の場合は入学の当時）の記録をもっととっておくとよかったです。これは児童の成長過程であり、今後の指導のための参考資料になると思う。

～～～ 観察・指導の記録をまとめる ～～～

このS子が他の児童と同じく話すことができるよう、つぎのようなことに留意して指導したい。

(1) 上記、5. 指導をふりかえっての（1）～（7）で書いたことを続けていきたい。特に（1）の自信をもたせることは、大切であると思う。

(2) 児童の生活は、学校での暮らしのほか、学校以外の暮らし（家庭・地域社会）もあるので、そこにおける生活をより活発にさせるため、家庭と連絡をとっていきたい。

(3) グループ学習（生活）もだんだん活発になってくるので、係活動と合わせていろいろな経験を通して、積極的な行動がとれるようにしたい。

足踏みはあっても後退はさせたくない。わずかでも前進させたいと願って取り組んできたが、S子の話すことの向上のほか生活全般に明るさと活気がみえはじめた。この1年間がS子にとっても担任自身にも、わずかながらにも前進ができ、教師の喜びや生きがいを感じている。

評

教師が緘黙児との初めての出会いを大切にして指導にあたったことが、何よりもその後の指導に好影響を与えたように思う。生育歴のほか行動分析を綿密に行い、温かいふん団気づくりの中で、認める・ほめる・励ますの強化因子によって望ましい行動を強化するなど適切な指導がなされている。さらに、S子の反応を見ながら効果的な強化因子を発見していくと変容も早いだろう。家庭との連絡もよく行われている。今後の指導としては、行動目標を細かく区切って課題を遂行させていくのもよいのではないか。その場合、何よりも大切なことは自主性を尊重することであろう。とにかく、指導の経過も順調のようなので、今後の研究と実践に期待したい。